地理学報告第86号 25～33　1998

鈴鹿川下流域における近世綿作の地域的特色

岩崎公弥*

I　はじめに

17世紀中期に記された『毛吹草』において，伊勢国では木綿をその名物としてあげている（永原，1990, p.150）。江戸初期における綿栽培の全国的展開状況は，なお十分には解明されていないが，江戸中期，正徳3年(1713)の『和漢三才図会』にも，伊勢松坂木綿は最上級品との評価が下されており，間接的ながら伊勢地方では，近世の初期から綿作が展開していたことが推測される。また伊勢北部の中心地であり藤堂藩の城下町であった津には，元禄11年(1698)に綿問屋4軒と仲買55名がその営業権を藩から公認され，津城下町は木綿の集散地として年額4,500駄の綿花の集散が行われ，天明3年(1783)には，綿花生産に関して藩は，年貢引き延ばしを約束してまで綿作奨励の方針をとっていたと言われる（深谷，1969）。

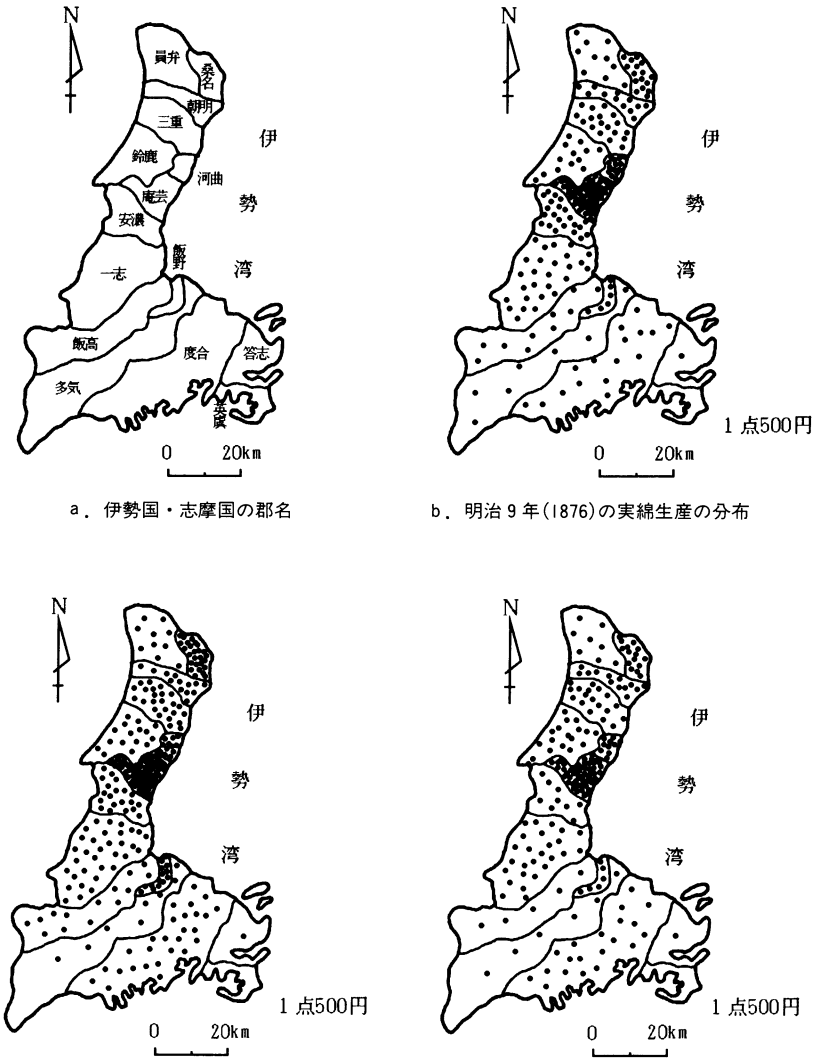
江戸期における伊勢地方の綿栽培の中心地は，櫛田川下流域を中心に，北は雲出川から南は宮川流域に及ぶ沖積平野一帯に展開していたと言われる（農山漁村文化協会，1992）。しかし後述するように，明治初期における統計資料によれば，綿栽培の中心地は，木綿の積出港として有名な白子を中心とする庵芸郡及び河曲郡となっている（岩崎，1994）。伊勢地方で生産された木綿織物は，松阪周辺から集荷されたものを「松阪木綿」，津周辺から集荷されたものを「伊勢木綿」，神戸（現在の鈴鹿市）周辺から集荷されたものを「神戸木綿」とそれぞれ呼んだ。しかし江戸へ出荷される伊勢方面の木綿には「松阪木綿」の商標が付された。この「松阪木綿」の商品化によって，伊勢商人は江戸大伝馬町において際立った存在となっていたことは周知のことである。伊勢商人については北島(1962)による研究に詳しい。

しかし，伊勢地方における綿作について，その栽培状況に関しては，今日まで十分に明らかにされてきたとは言えない。そこで，本論では，「神戸木綿」の産地であり，伊勢地方の綿作中心地の一つであったと考えられる鈴鹿川下流域の綿作について検討し，その生産状況や綿栽培の諸特徴について究明を行う。

II　明治期における実綿生産状況

江戸期における統計資料が存在しないため，明治前期の『全国農産表』を用いて，綿作状況の復原をあらかじめ行っておく。図1は明治9年(1876)から明治11年(1878)にかけての，伊勢国及び志摩国の郡別実綿生産状況を見たものである。3ヶ年次を通じてほぼ同様の分布傾向を知りうる。つまり，明治初期においては当地方の綿作は伊勢北部にその中心があったことが分かる。特に庵芸郡及びその北の河曲郡付近に実綿生産の集中が認められる。この地域は安濃川と鈴鹿川に挟まれた一帯で，今日の津市から鈴鹿市に及ぶ地域である。さらに北部の桑名郡地域にもやや綿作の集中が認められる。本論で取り上げる鈴鹿川下流域は，明治期における伊勢綿作地帯の一中心を形成した地

＊愛知教育大学地理学教室



a．伊勢国・志摩国の郡名

b．明治 9 年(1876)の実綿生産の分布

c．明治 10 年(1877)の実綿生産の分布

d．明治 11 年(1878)の実綿生産の分布

図 1　明治前期における伊勢・志摩地域の綿作状況
(資料：明治 9 ～11 年『全国農産表』より作成)

域と位置づけられる。

興味深いのは，江戸期において松阪木綿の中心地であった伊勢南部の櫛田川下流域では，それほどの綿作の集中を見せていない点である。松阪周辺は，砂質土壌で木綿栽培に適しており，なかでも江戸時代の当初より松阪近郊一帯，松阪東方の御糸郷(みいとごう)や東黒部(ひがしくろべ)が木綿産地として知られていた(三重県史編纂委員会, 1964, p.204)。しかし松阪木綿の江戸出荷高も寛政年間(1789-1801)をピークに減少し衰退に向かったとされる（農山漁村文化協会, 1992, p.167)。そのような江戸中期以降の木綿生産の衰退が，周辺農村における実綿生産の減少を招来したことも考えられよう。また木綿織物生産への特化によって，農業としての綿作部門が労働力不足によって衰微したことも考えられる。いずれにしろ松阪周辺の綿作の衰退については，

今後一層の究明が必要である。

III　史料と鈴鹿川下流地域の概観

本研究において，中心とした史料は，神戸藩領日永村の村役人であり木綿商人であった松岡家に残る文化元年(1804)の『神戸領郷中畑方高反別寄帳』(四日市市,1996, pp.547-558)である。同史料は木綿問屋松岡家が，領内約20か村の綿生産の状況を把握するために記録したと思われる史料であり，水田面積とともに，畑地における綿の栽培面積を記している。江戸中期以降の神戸藩とは，譜代大名本多氏15,000石，神戸（現鈴鹿市）を藩庁とした藩である。その藩領域は，鈴鹿川下流域一帯から一部四日市市域にわたっている。

当地域の西方に位置する鈴鹿山地は，秩父古生層及び花崗岩類などの硬い岩石から構成されているのに対し，丘陵地は第三紀鮮新統以後の比較的軟らかい岩石からできている。しかし花崗岩は風化が進むと崩れやすく，流域に砂の堆積を促進する。図2に示すように，鈴鹿川下流域は，河田地区を頂点に，放射状に西から東へ，断続的に配列する自然堤防列と，その間に生じた後背湿地とから成る三角州性の扇状地で，その先端は長太地区に及んでいる。自然堤防列の明瞭なものは3条あり，第一は神戸－肥田－土師－中若松を連ねるもの，第二はやや不明瞭ながら河田－十宮－須賀－林崎－南堀江を連ねるもの，第三は現鈴鹿川に沿うものである（鈴鹿市教育委員会,1980)。これらの自然堤防は後背湿地面とは1m程度の比高を持つ微高地をなし，表層部は粗砂－砂礫質である

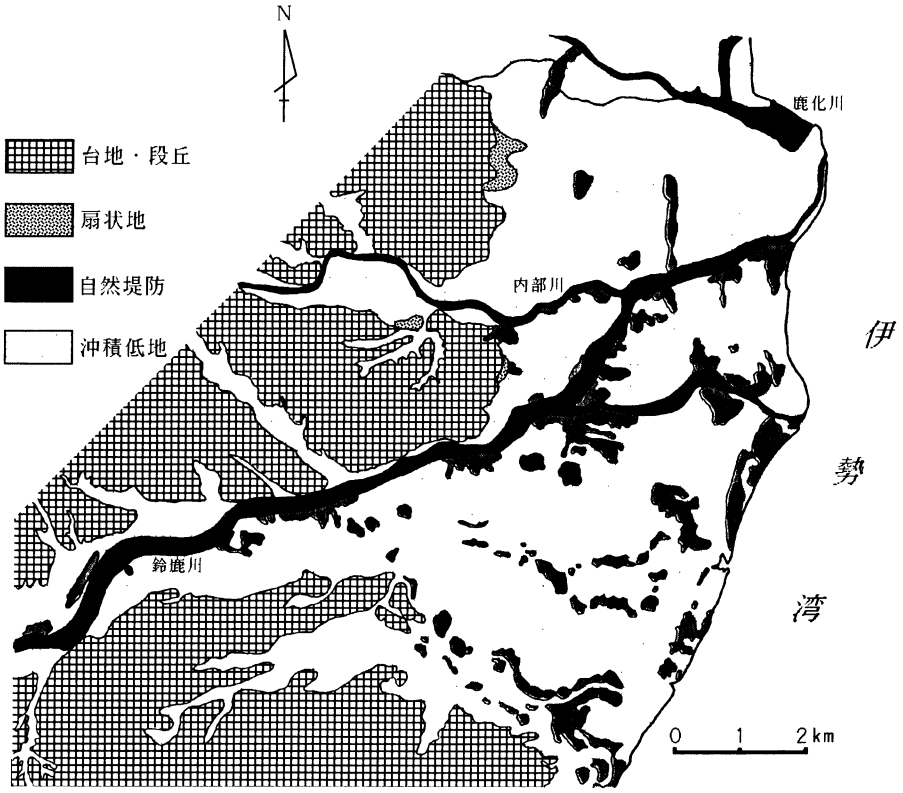


図2　鈴鹿川下流域の地形区分（資料：土地条件図より作成）

ことが多く，綿作に適した畑地土壌を提供した。これらの間に発達する後背湿地部は，厚さ1～4mのシルト層－泥質砂層－細砂層から成っており，稲作に適した水田として利用された。江戸期における水田の土性は，元禄5年(1692)河曲郡江嶋(えじま)村の『郷指出し』(鈴鹿市教育委員会,1986,pp.61-66)によれば「真土所　拾弐丁程，赤土所　弐丁五反程，砂土所　拾六丁八反程」とあるように，砂質土壌によって構成されていたと考えられる。

当地域に残る諸村の村明細帳の類から，江戸期における農民たちの農間余業の状況を見ると，享和元年(1801)の三重郡四日市町では「耕作之外男女稼，男者諸商内船稼日雇取往還稼，女者木綿を少々宛織申候」(四日市市,1991,pp.97-107)，天保13年(1842)の三重郡赤堀(あかほり)村では「当村ニ山野・海辺曽而無御座候，耕作之間ニ者，男者筵・草鞋・米簾・駕籠舁等之稼仕候，女者木綿織仕候」(四日市市,1991,pp.808-815)，元禄5年(1692)の河曲郡江嶋村では「耕作之間稼，男ハ駕籠かき，日用取仕候，女ハ木綿之機仕候」(鈴鹿市教育委員会,1986，pp.61-66))とあるように，いずれの村でも男性は交通関係の余業，女性は木綿織であったことが知られる。したがって，当地域では綿作を基礎として広範に木綿織物業が農村部に展開していたことが明らかである。

Ⅳ　綿作率からみた綿作状況

前述の文化元年(1804)『神戸領郷中畑方高反別寄帳』(四日市市,1996，pp.547-558.)をもとに，鈴鹿川下流域の綿作の状況の復原を行う。図3は，この文化年間の神戸藩領における村別綿作率を示したものである。ここに示される19か村は，当時

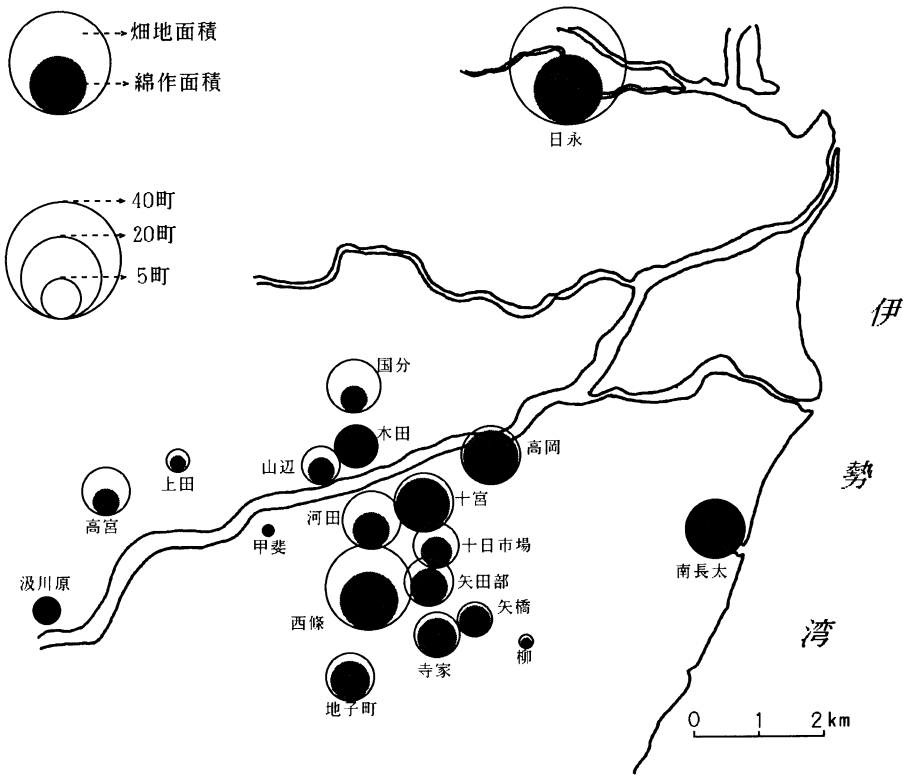


図3　神戸藩領諸村の畑地面積と綿作面積

表１　文化元年(1804)における伊勢国神戸藩領諸村の綿作状況

村　名	戸数 文化14年 (1817)	畑地面積	生綿畑 総面積	生綿畑等級別作付割合				畑方綿作率	1戸当たり 綿作面積
				上畑	中畑	下畑	下々畑		
	戸	畝	畝	%	%	%	%	%	畝
日永村	204	4431	1612	61	29	10		36	8
高岡村	103	1184	1015	59	6	28	8	86	10
十日市場	96*	652	345	99	1			53	4
矢田部村	14	761	460	72	13	15		60	33
十宮村	44	1189	1063	71	13	16		89	24
河田村	59*	1056	484	22	74	4		46	8
国分村	83	869	250	100				29	3
上田村	22	132	101	50	33	17		77	11
高宮村	119	754	227	1	10	89		30	2
地子町村	不明	726**	500		内訳不明			69	
寺家村	42	681	496	52	16		32	73	12
矢橋村	38	407	334	85	8	7		82	9
柳村	7	47	33		内訳不明			70	5
南長太村	114	1055	1055	70	24	5		100	9
西條村	67	2227	1151		内訳不明			52	17
木田村	95	556	549	91	9			99	6
山辺村	37	480**	230	38	43	19		48	6
汲川原村	39	250	250	53	47			100	6
甲斐村	2	37	37	93	7			100	19

注：＊十日市場の戸数は文政年間(1818-1829)時点の戸数，河田村の戸数は明治22年(1889)時点の戸数
　＊＊屋敷地面積を含む畑地面積
　1畝未満の数値は切り捨てを行った
資料：『文化元年(1801)神戸領郷中畑高反別寄帳』及び『角川日本地名大辞典24 三重県』より作成

の神戸藩領の全村である。したがって同藩領域では，全地域において綿作が実施されていたことが判明する。享和元年(1801)の四日市町でも「田畑作り物，田方ニ者不残稲ヲ植付申候，畑方者木綿粟稗麦菜種大根作り申候」(四日市市,1991，pp.97-107）とある。この他にも文政13年(1830)の三重郡六名村の『差出帳』(四日市市,1991,pp.343-346)では，「畑作冬ハ麦，夏ハ木綿・粟・稗・大豆・小豆・芋，此内粟・稗多分植申候」とあるように，付近一帯では多かれ少なかれ綿作が夏作として専ら畑地において実施されていたと考えられる。田方での綿作は当地域においては認められない。

図３をみると，概して自然堤防地帯の村々において綿作率が高くなっている。表１に示すように，19か村の内畑方綿作率が80％を越える村は，高岡村（86％），十宮村（89％），矢橋村（82％），南長太村（100％），木田村（99％），汲川原村（100％），甲斐村（100％）の各村である。一方最も低い畑方綿作率を示したのは国分村の29％である。次に低いのは高宮村の30％である。これら両村は台地地域に位置する村である。このように当地域の畑方綿作率は村によってかなりの差があることが知られる。それにしても畑方綿作率が60％を越える村は，19か村中12村もあり，全体としては畑方綿作率が高い地域といえよう。

全体としてみると，当地域の畑方綿作率の高さは，注目に値する。正徳３年(1713)三重郡六呂見村の『差出帳』（四日市市,1991，pp.504-516）には「畑方ニ大概木綿多ク作り」とある点や，享和元年(1801)三重郡馳出村の『差出帳』（四日市市，1991，pp.802-808）にも「畑木綿多分作り申候」と見える点などから判断して，村によっては畑地のほとんどを綿畑にしていたところもあったと考えて良かろう。因みに，六呂見村も馳出村も自然堤防地上に位置する村である。同様の土地条件にある三河国の矢作川中下流域の自然堤防地帯の村々の畑方綿作率が60％程度であった点（岩崎,1985）と比較しても，それを上回る綿作率を当地域は示

している。

表1から畑地等級別の綿作率を見ると，全体として上畑に綿が多く栽培されていたことが注目される。矢作川流域の西本郷村の例でも本畑における全綿作地の42%が上畑においてもっとも多く栽培されていたが，鈴鹿川下流域の農村ではそれを上回っており，上畑への綿の作付率が高い。それに対し中・下畑には，粟・稗などの雑穀類の作付けが多くなっている。

以上の綿作状況から見た鈴鹿川下流域の綿作の特色は，畑方綿作率の高さと上畑への綿作付の集中という2点に集約されよう。

V　綿作経営の諸側面

図4は，村別に1戸当たりの綿作面積を算出したものである。但し，実際に綿作を行っている農家数は史料からは得られなかったので，図4に示された綿作面積は，それぞれの村の全農家が綿作に従事したと仮定して，村の総戸数をもとに算出した数であることを断っておく。したがって実際の1戸当たり綿作面積は求めた値より幾分大きくなると予想される。3分の1以上の村々で，1戸当たり綿作面積が1反を上回っている。神戸城下町近郊の矢田部（やたべ）村では，1戸当たり3反3畝という広い綿作経営を行っていた。比較的城下町に隣接した村々において，1戸当たり綿作面積が大きい傾向がみられる。一方，台地上に位置する高宮村と国分村は，1戸当たり綿作面積がそれぞれ2畝と3畝と自然堤防上の村々に比較して規模が小さい。この点は西三河の綿作規模と類似している

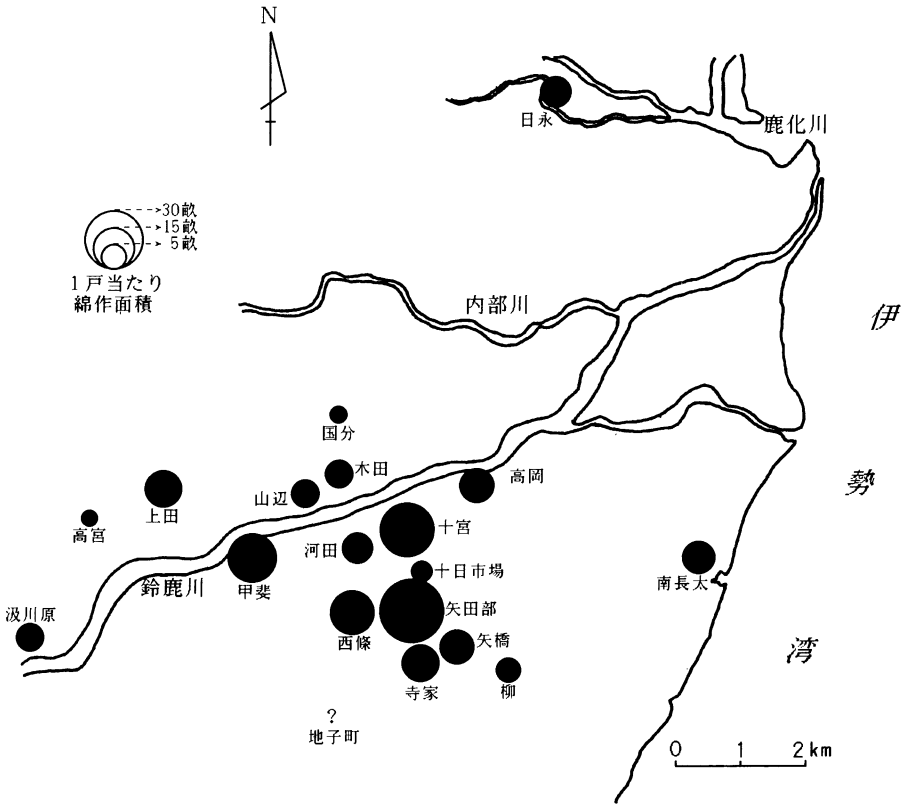


図4　神戸藩領諸村における1戸当たり綿作面積

（岩崎，1985）。しかし１戸当たり綿作面積が１反未満の村々が半数近くを占めており，全体としてみるならば，尾張の尾西地域や西三河地域とほぼ同程度の綿作経営規模を有していたと言えよう（岩崎，1985，1994）。

次に，綿の生産性について検討する。これに関しては十分な史料がないが，天保13年（1842）における三重郡赤堀村の『本郷本田諸色明細帳』（四日市市，1991，pp.808-815）によると，「畑方木綿作之儀，百姓共平均一反申ニ付拾弐三貫目ゟ弐拾貫目位迄取入申候」とある。つまり綿の反当収量は，12～20貫程度である。この値も尾張地域の綿の平均的な反当収量と同じ水準である。全般に伊勢地域を含めて東海地域の綿の生産性は，畿内地域の反当収量の60～70％程度の水準であったといえよう。

綿の生産性は，施肥との関係が大きいので，次にその点をみておきたい。当地域の施肥の一般的状況については次の史料によってある程度知りうる。享和元年（1801）四日市町の『諸色明細帳』（四日市市，1991，pp.97-107）では「田畑こやし干鰯買い調べ作り申候」，同年の馳出村の『差出帳』（四日市市，1991，pp.802-808）では「田畑肥シ干鰯多ク用申候」，天保13年（1842）赤堀村の『本郷本田諸色明細帳』（四日市市，1991，pp.808-815）では「田畑こやし之儀，草芝等一円無御座候ニ付，不残干鰯買調入申候，近年不怪高値ニ付難渋仕候」などと記されており，干鰯の使用はかなり広範に展開していたものと理解されよう。

反当施肥量についてみると，文政13年（1830）六名（ろくみょう）村の『差出帳』（四日市市，1991，pp.343-346）には「田畑肥シ，草芝・干鰯用申候，其内干鰯多分用，壱反ニ付干鰯粉壱石弐斗宛」とある。同村の場合さらに「畑作冬ハ麦，夏ハ木綿・粟・稗・大豆・小豆・芋，此内粟・稗多分植申候」とあることから，綿作は本村では畑作物の中心ではなかったと考えられる。干鰯粉を反当１石２斗程，施肥しているが，仮に綿へも同量の干鰯が投入されたとすれば，畿内当たりの反当施肥量２石に比べればやや少ない。六名村では，草肥も併用しているようであり，これによりある程度の施肥の不足を補っていたと考えられる。

元禄５年（1692）江嶋村の『指出し』（鈴鹿市教育委員会，1986，pp.61-66）によれば「畑壱反ニ付鰯肥麦作夏作両度ニ限廿五六匁程，但鰯値段金壱分ニ付弐石七，八斗位，灰肥ハ手前ニ溜リ申斗ヲ置申候，土肥水肥ハ不断仕候，其外之肥ハ無御座候」とあって，畑での反当施肥量に換算すると年間4.5石程度となる。夏作と冬作との施肥の内訳が不明であるので綿などへの施肥量は分からないが，仮に夏作と冬作への施肥量が同じであったとすると，夏作には約反当2.2石ほどの干鰯が使われたことになる。この程度の干鰯投入量ならば，畿内地域の投下量に匹敵している。

伊勢国は元来，江戸干鰯問屋の上得意であって『宗国史』によれば，中百姓一人前の耕作面積として，田方７反（高19石２斗余），畑方４反（高３石３斗余），計11反をあげ，その魚肥代価として金３両２分ほどをあげている（三重県史編纂委員会，1964，pp.201-202）。また正徳３年（1713）六呂見村の『差出帳』（四日市市，1991，pp.504-516）によれば「田畑こへ干か大概壱反ニ付弐分弐朱程宛ノ積リ四日市ニ而調申候」とあるように，当地域の干鰯購入地は四日市であった。四日市からは隣国尾張地域へも盛んに干鰯が移出されていた。当地域はこのような干鰯の集散地に近かったため，早期から干鰯の利用が進んだものと解される。しかし三河などに比べて干鰯投入量は多いものの，綿の生産性は三河とそれほど変わらない点も一つの特色である。

最後に，綿の栽培暦について見ておく。文化４年（1807）の『日永村諸事記』（四日市市，1991，pp.

456-485）によれば「四月廿七日麦刈，鉄砲川大方苅申候事廿八日迄ニ，廿九日雨天之様子ニ御座候処，廿九日上々天気ニ而綿蒔キ大躰仕舞申候事，結構成順気ニ而一同大慶仕候」とあるところから，綿の播種期は陰暦４月末であり，麦刈りが同時に開始される時節であったと思われる。これは三河付近の播種期に比べるとやや遅い。

Ⅵ　おわりに

伊勢地方は，松坂木綿に代表されように江戸時代の初期から，綿や木綿の生産が盛んに実施された地域である。江戸期における中心的な綿作地は，伊勢中部から南部にかけての一帯であったことが，各種の資料から推察される。しかしながら近世末期から明治初期にかけては，綿作の中心は伊勢中北部の庵芸郡や河曲郡などの白子を中心とした鈴鹿川下流域に存在した。本論では，この鈴鹿川下流域の綿作を対象に，綿作率や生産性，施肥状況などについて検討を加えた。その結果次のような諸点が明らかとなった。

綿作地帯の自然条件としては，鈴鹿川の作った自然堤防の存在があげられる。当地域は上流域に花崗岩地帯が存在し，その風化物質が下流域に堆積をした砂質土壌をなす地域であった。このような自然条件は東海地域を代表する矢作川中下流域の自然堤防地帯の綿作地の自然条件と類似している。今日の鈴鹿川の砂の堆積した河川景観は，矢作川のそれに酷似している。

台地地帯における綿作率は自然堤防地帯のそれに比べてやや低かった。綿作はすべて畑方綿作として実施されており，綿作地以外の畑地には雑穀類が作付けされていた。当地域の綿作率は，対象とした村々の３分の１において，80％を越える高い綿作率を示している。村によっては畑地のほとんどを綿畑にした所もあったと考えられる。また綿は上畑に多く作付けされている点も一つの特徴である。

次に１戸当たりの綿作率を試算した。ここでも対象とした村々の３分の１以上の村々で，１戸当たり綿作面積が１反を上回っており，これらの村々はすべて自然堤防地帯の村であった。しかし１戸当たり綿作面積が１反をかなり下回る村々も存在し，全体として見るならば，尾張の尾西地域や西三河地域と同程度の綿作経営規模を有していたと考えられる。

綿の生産性については，特定の村についてのものであるが，反当12～20貫程度の実綿の収穫をあげており，これも尾張地域の実綿反当収量と同程度であったと判断された。畿内の収量に比較すれば，かなり低いものである。

施肥状況についてみると，四日市という干鰯の集散地を近くに控えていた関係で，割合に早期から干鰯の導入が進んでいたと考えられる。綿への干鰯投入量についての資料が得られなかったので，畿内などとの直接的比較が難しいが，おそらく反当１～２石程度の干鰯投入量であったと想定される。仮に綿へ反当２石程度の干鰯が施肥されたとすれば，畿内の水準に近い。しかし反当収量は畿内のそれに及んでいない。このことから，その他の点での綿作技術が劣っていたことも考えられる。

以上，伊勢の鈴鹿川下流域諸村の綿作について知見を述べた。綿作の技術的側面については，営農に関する農事記録などの資料の発見が必要である。また綿作中心地の推移についても，別の視点からの考察が必要であろう。残された課題は多いが，今後の解明に期待したい。

参考文献

岩崎公弥(1985)：西三河地域における近世綿作の地域的特色，地理学評論，58-6,pp.349-368.

岩崎公弥(1994)：尾張地域における近世綿作の地域的特色，歴史地理学，170,pp.1-25.

梅原三千・西田重嗣(1960)：『津市史』第２巻，津市役所，800p.

角川日本地名大辞典編纂委員会(1983)：『角川日本地名大辞典 24 三重県』，角川書店，1643p.

北島正元編著（1962)：『伊勢商業と伊勢店』，吉川弘文館，687p.

鈴鹿市教育委員会(1980)：『鈴鹿市史』第１巻，鈴鹿市役所，670p.

鈴鹿市教育委員会(1986)：『鈴鹿市史』第５巻　史料編，鈴鹿市役所，719p.

永原慶二(1990)：『新・木綿以前のこと』，中央公論社，216p.

深谷克己(1969)：『寛政期の藤堂藩』，三重県郷土資料刊行会，304p.

三重県史編纂委員会(1964)：『三重県史』三重県，682 p.

四日市市(1991)：『四日市市史』第８巻　史料編近世Ⅰ，四日市市，893p.

四日市市(1996)：『四日市市史』第10巻　史料編近世Ⅲ，四日市市，988p.